受賞作　岩波書店　2007年

『歴史経験としてのアメリカ帝国 —米比関係史の群像』

受賞者　**中野　　聡**（なかの・さとし）

受賞者略歴

東京都出身。1983年一橋大学法学部卒業。1985年一橋大学社会学修士、1995年一橋大学社会学博士。1990年より神戸大学専任講師、助教授を経て、1999年より一橋大学社会学部・大学院社会学研究科助教授、2003年より教授。フィリピン大学客員研究員（1994－95年）、コロンビア大学客員研究員・安倍フェロー（2005年－06年）。専門はアジア・太平洋国際関係史。著書『フィリピン独立問題史』（龍渓書舎、1997年、アメリカ学会清水博賞）。

フィリピンという国名を隠して社会の特徴を列挙したらラテンアメリカの国に違いないと思われた、という主旨の笑い話を昔聞いたことがある。フィリピンは東南アジアの中で異質な国だというのが笑いのツボであるが、アメリカの存在感の大きさないしアメリカの「近さ」から言って、フィリピンはラテンアメリカに位置していてもおかしくはないだろう。

アメリカとフィリピンとは「近い」だけでなく、似ていると言う人もいよう。実際、どちらの国民も、自国が立派な民主政治を行っていると自負しており、選挙「戦」というよりは選挙「祭」をとおして、映画俳優を大統領に選ぶ。しかしアメリカは、フィリピンと同じ頃に併合したハワイを60年後に50番目の州にしたが、フィリピンをそのようには扱わなかった。

本書は、この両国の歴史的関係を多面的・内省的に回顧している。国際関係史の著作ではあるが、国家とか政府といったノッペリとした無機的な主体の関係ではなく、個々人の顔が見える関係である。本書の内容を要約してしまうと、顔が見えなくなってしまうので、それはやらない。既に発表した論文に基づいているが、全体として統一がとれており、読みやすい。一読をお勧めする。

本書で取り上げられているテーマは、1世紀ほど前のアメリカによるフィリピンの植民地化（スペインとの

戦争での勝利）がもたらしたものの総括である。それは、アメリカとフィリピンの政治文化の収斂（と言うと強すぎるだろうか？）であり、アメリカ人（外交官、軍人、CIA要員）のフィリピン関与の中に、そしてフィリピン人（兵隊、労働者）のアメリカでの生活の中に見出すことのできる複雑な心情関係と心象風景である。つまり、アメリカとフィリピンというどちらも民主国家を自負している社会の相互作用（もちろん非対称的だが、決して一方的ではない）を個人（固有名詞）レベルにまで降りてミクロに描写しながら、マクロな関係を浮かび上がらせている。国際関係史としては異例だが異彩を放っている。

書名からの連想を一言。近年、アメリカを題材にした帝国論が流行っている。いろいろ難解な議論が飛び交っているが、一言で言えば帝国の本質とは、外に対しては単一の政治体のように振る舞いながら、その内部においては不平等な国際関係が成立している制度である。この理解に従えば、本書は、まさにアメリカ帝国を描いているのであり、米比関係はその中に組み込まれているのである。アメリカ合衆国が帝国なのではなく、合衆国とフィリピンとの関係がアメリカ帝国の一部を形成しているのである。

アメリカ帝国について、本書はいろいろと考えさせられる。米比関係についての語りを読み進めながら、頭の中で考えていることは日米関係であることが多かった。同盟、基地、移民などなど。また、アメリカの持つ「ソフト・パワー」についても、帝国的構造の中で考察すべきことを示唆している。

アジア太平洋におけるアメリカの存在について、われわれとアメリカとの関係について、過去だけでなく現在そして未来にわたって、本書はいくつも問題を提起している。本書を大平正芳記念賞に相応しい作品であると評価する所以である。

選評　山影　進